



Title	過渡期の自然 : J. Thomson : The Seasons の自然観
Author(s)	三谷, 治子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1972, 5, p. 7-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47741
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

過 渡 期 の 自 然

— J. Thomson: *The Seasons* の自然観 —

三 谷 治 子

I

「古典主義」と「ロマン主義」は文学史における二つの大きな山であり、かつこの二つの用語をめぐる論ずる人の数に匹敵すると言われる程多くの議論と定義を生み、なおこの二つの流れが文学における大きな興味の対象となり続けていることは周知の事実である。

Scotland 生まれの詩人 James Thomson (1700 ~ 1748) の処女詩集 *Winter* 初版がロンドンで出版された1726年は、一名 'The Age of Reason' 或は 'The Age of Pope' とも呼ばれるように Dryden に続き Pope が君臨し、感情よりも理性が尊ばれ、詩人達は都会を中心に人間を主題として歌うことに専心していた古典主義全盛の時代であった。このような時流の中にありながらも *Winter* は出版の年内に数版を重ね 1730 年には 'Summer' (1727) 'Spring' (1728) 'Autumn' (1730) の三つの季節と更に造化の神への讃歌 'A Hymn' (1730) を付け加えた作品 *The Seasons* が完成、出版された。

James Delacour が 'Thomson is another name for nature now.'⁽¹⁾ と端的に評したように、田園に目を向け自然とその様々な様相を生彩な筆致で描写したこの作品には世人の目を見張らせるものがあり、当時の保守派の文壇の注意をも引くに十分画期的な作品であった。後、イギリスにおいては Wordsworth, Keats, Shelley ら多くのすぐれた詩人と作品を生み、

ドイツ、フランスにおいても絢爛たる花開いたロマン主義の萌芽はすでに Thomson において芽ばえていたと言っても決して過言ではないであろう。L. R. Furst の指摘するようにロマン主義の開花は長年月におよぶ緩慢な進化の産物であり、古典主義からロマン主義への推移の特色の一つを自然観の変化という立場に立って捉える時、*The Seasons* は過渡期にある作品として興味深い多くの示唆を含んでいるのである。

II

Winter は Scotland の牧師の子として生まれ Edinburgh 大学での神学研究の志半ばにして London にのぼった Thomson が故郷の山河の新鮮な印象をもとにまとめたものであった。時代の風潮にそぐわない題材、形式にもかかわらず予想外の好評を得た Thomson は、1926年6月の第二版に付した序文において進取の意気込みをもって自身の詩の理想、詩作の態度を表明している。若き詩人はその目に映じた当時の文壇を ‘a dry, barren theme’ に ‘wit’ と ‘expression’ をもてあそんでいる ‘the wintry world of letters’ であると非難し、詩人自身の理想とする詩を、‘the most charming power of imagination, the most exalting force of thought, the most affecting touch of sentiment’ をもつもの、一言で言うなら ‘the very soul of learning and politeness’⁽³⁾ であると規定している。そして詩の働きは ‘at once to please, instruct, surprise, and astonish’⁽⁴⁾ であると言明する。‘the very soul of learning and politeness’ という言葉が時代の雰囲気を漂わせてはいるが、全体の趣旨からみればこれらの言葉は18世紀初葉の詩人の言葉というよりはむしろロマン派詩人の言葉とする方がふさわしいものである。故に、このような詩の作用を前提とする時、詩の対象として人為の匂い濃い都会での生活を避け、自然が選ばれたことも当然のこととしてうなずけるのである。

I know no subject more elevating, more amusing ; more ready to awake the poetical enthusiasm, the philosophical reflection, and the moral sentiment, than the works of Nature.⁽⁵⁾

Thomson は更に議論を続け、自然がすぐれた詩の題材であり思惟の対象であり得たがゆえに古代の卓越した詩人達は ‘retirement and solitude’ を好み ‘the wild romantic country’ を彼らの喜びとしたと述べる。⁽⁶⁾ これは明らかに都会的・理知的なものを、形式と秩序を尊重する古典的な思想とは相入れない態度であり、想像力を尊び感情を重んずるロマン主義的な傾向を明確に示している。

しかし、このような革新的な要素を有しているにもかかわらず、我々が手にする *The Seasons* が後の Wordsworth, Keats からロマン派詩人の抒情性・主観性には遠く、どちらかと言えば叙述詩と呼ぶにふさわしい客観的描写を主とする作品となっていることは、時代の影響をまぬがれえない文学の一性質を示し、作品の思想内容そのものとも関わる興味深い問題を呈している。

詩人 Thomson の真価が ‘a purely descriptive poet’ である点に見入だされることは一般に認められた評価であり、歌われた自然が詩人自身によって体験された自然であり、しかも詩人の imagination に直接触れた自然であることは、Stopford Brooke も指摘するとおりでである。⁽⁷⁾ 詩人自身 ‘Who can write like nature?’ と嘆息しているように、その自然描写の精密で生彩ある様子には生の自然に迫るものが感じられる。ここでいくつかの例を鑑賞してみよう。

まず、ものうい夏の午後が描かれ、John Aikin が ‘a scene so surprisingly natural that our perception of it is no less lively than if it really existed before our eyes.’ と評している一節である。⁽⁸⁾

The daw,

The rook, and magpie, to the grey-grown oaks
 (That the calm village in their verdant arms,
 Sheltering, embrace) direct their lazy flight;
 Where on the mingling boughs they sit embowered
 All the hot noon, till cooler hours arise.
 Faint underneath the household fowls convene;
 And, in a corner of the buzzing shade,
 The house-dog with the vacant greyhound lies
 Out-stretched and sleepy. In his sumbers one
 Attacks the nightly thief, and one exults
 O'er hill and dale; till wakened by the wasp,
 They starting snap.⁽⁹⁾

次に見る一節は 'fly, flood, fits, sweep, shoot, tossing' などの言葉の imagery の助けによって動きの効果が高められ、視覚的な喜びを伴う一幅の絵となっている。

Rent is the fleecy mantle of the sky;
 The clouds fly different; and the sudden sun
 By fits effulgent gilds the illumined field,
 And black by fits the shadows sweep along—
 A gaily chequered, heart-expanding view,
 Far as the circling eye can shoot around,
 Unbounded tossing in a flood of corn.⁽¹⁰⁾

又、J. L. Robertson が 'Thomson's highest achievement in natural description'⁽¹¹⁾ であるとして賞賛を惜しまない冬の雪景色に目を転じよう。

The keener tempests come: and, fuming dun
 From all the livid east or piercing north,
 Thick clouds ascend, in whose capacious womb
 A vapoury deluge lies, to snow congealed.
 Heavy they roll their fleecy world along,
 And the sky saddens with the gathered storm.
 Through the hushed air the whitening shower descends,

At first thin-wavering ; till at last the flakes
 Fall broad and wide and fast, dimming the day
 With a continual flow. The cherished fields
 Put on their winter-robe of purest white.
 'Tis brightness all ; save where the new snow melts
 Along the mazy current. Low the woods
 Bow their hoar head ; and, ere the languid sun
 Faint from the west emits his evening ray,
 Earth's universal face, deep-hid and chill,
 Is one wild dazzling waste, that buries wide
 The works of man.⁽¹²⁾

これら独自の美をもつ描写の他にも 'Autumn' 中の狩猟や収穫の生き生きしたスケッチ、のぼりくる太陽を描いた堂々たる 'Summer' の一節、みずみずしく美しい春の朝など、ただ概念的に歌った当時の田園詩とは異なり、読者に新鮮な驚きと喜びを与える章句が散在し我々はここに外的自然に対する考え方の変化の端緒を見ることが出来るのである。それはすなわち、機械的宇宙観から有機的宇宙観への推移の出発点であり、ここにおいて始めて自然は人間の手を離れて自律的に存在し、その有機的な存在をも認められるにいたったのである。それが故に、従来の概念的な型にはまった詩句、用語を捨て、自らが好み自らが撰択した言葉を用い、自らが観察した自然を表現することが詩人達にとって可能となったのである。Thomson が当時詩壇を風靡していた heroic couplet を用いず、自由で韻律にとらわれない blank verse をその形式としたことも、この新しい自然観に必然的であったと理解出来るのである。しかし、Thomson の自然はあくまでも過渡期のそれであり、すぐにロマン主義的な意味での有機的自然と結びつくことにはならない。The Seasons の詩句中にはなお多くの Latinism、古めかしい poetic diction や personification の手法が残存し、この作品のもつ古典的性格の一面を示しているのと同じく、自然の中に自己を没入させ自然と共に喜び、共に悲しむといったロマン派的な

自然と人間との交流はみられず、自然とそれを眺める自己とを区別する客観的態度が顕著であることは明記されねばならない。

well pleased to recognize
 In nature and the language of the sense,
 The anchor of my purest thoughts, the nurse,
 The guide, the guardian of my heart, and soul
 Of all my moral being.⁽¹³⁾

引用は Wordsworth : 'Tintern Abbey Lines' 中の一節である。この一節と既述の 'Winter' 序の '詩的情熱, 哲学的瞑想, 道徳的感情を呼び起こす' (to awake) ものとしての自然の把握とを比較する時, 両者の差異は自から明白であろう。Wordsworth は自然の中に人間を指導する力, 乳母のように人間が寄りかかることの出来る力を見ていたのである。彼の自然は単なる外的対象にとどまらず同時に作者自身の感情, 心理の投影でもあるのだ。しかるに Thomson にあっては, 自然と人間は分離しており, 自然は人間の活動の背景として, 人間存在の場として存在するものである。根本においては主体はあくまで理知的人間の側にあり, 従って Thomson の自然描写は 'purposely pictorial' であり 'realistic' である。

文学作品がその時代の他の芸術はもちろん, 政治, 経済, 哲学, 科学などあらゆる思潮に啓蒙, 或は制約され, 故に文学が又, その時代の姿を反映, 再現している例は我々がよく目にするものである。Thomson がその倫理観においては Shaftesbury (Anthony Ashley Cooper, Earl of, 1671-1731) の説を受け継ぎ, 'A Hymn' が彼の思想を作品化したものであることはよく指摘される点である。その思想的影響に関し, 又, 見逃がすことが出来ないのは Newton である。

Thomson が Newton に関心を寄せていたことは, 1727年彼の死を悼んで 'To the Memory of Sir Isaac Newton' と題する哀歌を献じている

こと、哀歌以前に書かれた *Winter* や *Summer* においても彼の学説を題材としていることなどからも容易に推察できる。従って、対象としての自然に向けられた Thomson の目は、近代科学の知識に裏付けされたそれであり、作品のすぐれた写実性、生彩さの源をこの科学的観察力に求めることは妥当である。では、ここで Thomson の目に映じた自然の姿を観察しておこう。

Thomson の見た自然は、目に見えない原子の世界から、遠く天体のかなたまでを含む一大体系としての自然である。そしてそれは科学的知性をもって見るならば、万有引力の作用による‘静かな調和ある’宇宙である。

All intellectual eye, our solar round
 First gazing through, he, by the blended power
 Of gravitation and projection, saw
 The whole in silent harmony revolve.
 From unassisted vision hid, the moons
 To cheer remoter planets numerous formed,⁽¹⁴⁾
 By him in all their mingled tracts were seen.

科学的知識の披露は作品中にかなり多く見られるが、ここでは月と虹に関する二例を引用しておこう。

Turned to the sun direct, her spotted disk
 (Where mountains rise, umbrageous dales descend,
 And caverns deep, as optic tube describes)
 A smaller earth, gives all his blaze again,
 Void of its flame, and sheds a softer day.⁽¹⁵⁾

Here, awful Newton, the dissolving clouds
 Form, fronting on the sun, thy showery prism;
 And to the sage-instructed eye unfold
 The various twine of light, by thee disclosed
 From the white mingling maze. Not so the swain;

He wondering views the bright enchantment bend
 Delightful o'er the radiant fields, and runs
 To catch the falling glory; but amazed
 Beholds the amusive arch before him fly,
 Then vanish quite away.⁽¹⁶⁾

又、Thomson が形状よりも、対象の光 (light) と色彩 (color) に対しよりすぐれた観察力と表現力を備えていたことはよく例証されることである。まず、春の庭の光と色あふるるばかりの様を眺めてみよう。

Fair-handed Spring unbosoms every grace—
 Throws out the snow-drop and the crocus first,
 The daisy, primrose, violet darkly blue,
 And polyanthus of unnumbered dyes;
 The yellow wall-flower, stained with iron brown,
 And lavish stock, that scents the garden round:
 From the soft wing of vernal breezes shed,
 Anemones; auriculas, enriched
 With shining meal o'er all their velvet leaves;
 And full ranunculus of flowing red.
 Then comes the tulip-race, where beauty plays
 Her idle freaks: from family diffused
 To family, as flies the father-dust,
 The varied colours run; and, while they break
 On the charmed eye, the exulting florist marks
 With secret pride the wonders of his hand.⁽¹⁷⁾

まさに Myra Reynolds のいう ‘the lines glow like a painter’s palette’⁽¹⁸⁾ との表現がふさわしいはなやかな光景である。

この光、色彩に関するすぐれた imagery が Newton の *Optics* に刺激、啓発され創造されたものであることは多くの評家によっても認められている。Majorie Nicolson は、Thomson が ‘color’ と ‘light’ をそれぞれ ‘beautiful’ と ‘sublime’ な詩的 imagery として意識的に区別していると分析し、‘Hymn’ 冒頭の引用によって例証している。

These, as they change, Almighty Father! these
 Are but the varied God. The rolling year
 Is full of thee. Forth in the pleasing Spring
 Thy beauty walks, thy tenderness and love.
 Wide flush the fields; the softening air is balm;
 Echo the mountains round; the forest smiles;
 And every sense, and every heart, is joy.
 Then comes thy glory in the Summer-months,
 With light and heat refulgent. Then thy sun
 Shoots full perfection through the swelling year:
 And oft thy voice in dreadful thunder speaks,⁽¹⁹⁾

つまり、‘color’は‘beautiful’な image として春に顕著に現われ、‘light’はその強烈さとも関係して‘terror’と‘majesty’を伴う‘sublime’な image として夏に多く見られるというのであるが、⁽²⁰⁾ここではこれ以上詳述することは避けよう。

以上考察してきたように、Newton の *Optics* の影響が‘light’と‘color’の imagery の区別を示唆し、*The Seasons* の章句に微妙で美しく、そして豊かな効果を生じさせているということ、或は、その科学的な宇宙、自然観察の態度が作品の客観性を導き、すぐれた写実詩とすることに寄与していることは、見逃がすことの出来ない事実である。しかし、この事実以上に重要であり、かつぜひとも考慮されねばならないことは、Newton の学説が Thomson の自然観を形成する思想的背景として、作品の内容とも直接に関わる大きな影響を及ぼしているという点、つまり Thomson が単に Newton の科学的発見の事実のみを受け入れていたのではなく、その思想界に及ぼした影響をも正しく把握していたという点である。

III

The Seasons の詩としての優秀性をその描写の写実性にのみ求めるこ

とは一面的な見方であり、又、いかにこの詩が後のロマン派の諸作品と比べ、豊かな感情の動き、想像力の躍動を伴わないとはいえ、行中の章句に、或は行間に、作品全体を流れる自然とその中での人間のあり様、そして自然の不思議に対する作者の思いと心の動きを読みとらないとするなら、それも又一面的にすぎるといわねばならない。

古来、宇宙の神秘は人間にとって最大の謎であり、関心の対象であった。自然という広大な対象を眼前にし、その様々に変化する様相、中に存する種々の生命、その生活などに思いをいたす時、自然の不思議は増大する疑問として我々に迫ってくるのである。Thomson にあっては、その疑問は ‘The whole in silent harmony revolve’ として宇宙の体系を一つの秩序のうちに把握することによって解決されたかに見えた。しかし、はたして Thomson は単に調和ある姿としての自然のみを見ていたのだろうか。確かに、次に引用する ‘Spring’ の一節は、暗い冬の生活を抜け出し霜解けた大地の中で勤労にいそむ農民の姿を描いた、美しく平和な情景である。

Forth fly the tepid airs; and unconfined,
 Unbinding earth, the moving softness strays.
 Joyous the impatient husbandman perceives
 Relenting Nature, and his lusty steers
 Drives from their stalls to where the well-used plough
 Lies in the furrow loosened from the frost.
 There, unrefusing, to the harnessed yoke
 They lend their shoulder, and begin their toil,
 Cheered by the simple song and soaring lark.
 Meanwhile incumbent o'er the shining share
 The master leans, removes the obstructing clay,
 Winds the whole work, and sidelong lays the glebe.⁽²¹⁾

しかし、‘Winter’ には、嵐、洪水、飢饉、地震、吹雪など冷酷な自然の力の前に屈する人間の無力な様が描かれている。次の一節は激しく無気味

な冬の洪水のありさまである。

Wide o'er the brim, with many a torrent swelled,
 And the mixed ruin of its banks o'erspread,
 At last the roused-up river pours along :
 Resistless, roaring, dreadful, down it comes,
 From the rude mountain and the mossy wild,
 Tumbling through rocks abrupt, and sounding far ;
 Then o'er the sanded valley floating spreads,
 Calm, sluggish, silent ; till again, constrained
 Between two meeting hills, it bursts a way
 Where rocks and woods o'erhang the turbid stream ;
 There, gathering triple force, rapid and deep,
 It boils, and wheels, and foams, and thunders through.⁽²²⁾

この二つの引用に現われた相反する自然の姿——平和な生命の源泉としての自然と暴威としての自然——は、宇宙調和の観念に反するものである。では、この二つの自然の呈する矛盾を Thomson はどのように解決、調和させていたのだろうか。

The Seasons の自然観の基底には、Newton の学説が大きく力を持っていることは、すでに述べたとおりであるが、ここで注意せねばならないことは、Newton が運動の三法則、光学理論などの発見によって古典物理学、古典力学の確立に寄与したばかりではなく、彼が又、神を宇宙の最初の推動者とする理神論 (Deism) の立場をも表明していたことである。そしてこの17世紀以来イギリス及びヨーロッパ全体に優勢を占めた理神論に近い考え方を、Thomson も又、ごく自然にとり入れていたのである。前述冬の洪水の引用に続き、Thomson は偉大なる‘自然’に対し次のように呼びかける。

Nature! great parent! whose unceasing hand
 Rolls round the Seasons of the changeful year,
 How mighty, how majestic are thy works!

With what a pleasing dread they swell the soul,
 That sees astonished, and astonished sings!⁽²³⁾

豊かな恵みの春の姿も自然であるならば、激しく破壊的な脅威も又自然の真の姿なのだ。この脅威を眼前に Thomson は、自然のあるがままを、その大なる力を ‘pleasing dread’ をもって受け入れ、驚きをもって感じ、驚きをもって歌うのだ。自然の力学的法則を理解し、科学的に宇宙を観察するなら、それは秩序ある体系として調和の中に存するのだ。しかし、人間の力では説明しきれない自然の変化、その神秘が、背後にある何者かの存在を予測させるように、宇宙を科学的に眺め、理解すればする程、その無限とそして人間の知力の限界を感じ、宇宙を統率し操作する力のあることを思わずにはいられないのだ。Thomson 自身、このことを Newton への哀歌の中で語っている。

What wonder thence that his devotion swelled
 Responsive to his knowledge? For could he
 Whose piercing mental eye diffusive saw
 The finished universality of things
 In all its order, magnitude, and parts
 Forbear incessant to adore that Power
 Who fills, sustains, and actuates the whole?⁽²⁴⁾

‘The eternal cause, support and end of all’ と呼ぶ Thomson の神は、単に宇宙の推動者たるにとどまらず、自然のすべてを満たし、すべてに遍在するものである。この考え方において Thomson は、理神論の影響を大きく受けていたとはいえ、すでにロマン主義的な汎神論へ一歩踏み出していたといえるだろう。

Should fate command me to the farthest verge
 Of the green earth, to distant barbarous climes,
 Rivers unknown to song, where first the sun
 Gilds Indian mountains, or his setting beam

Flames on the Atlantic isles, 'tis nought to me;
 Since God is ever present, ever felt,
 In the void waste as in the city full,
 And where he vital spreads there must be joy.⁽²⁵⁾

Thomson が小鳥や動物に対し愛情を示し、農民の窮状への同情を歌い富有階級への反撥を表明する humanist であることはよく知られている事柄である。又、*Liberty* と題する一篇では自由を論じ、愛国的情熱を歌ってもいる。これらの事実からは、*Great chain of Being* の世界観に代表される当時の静的、固定的な世界観を破る動的な姿勢がうかがわれはしないだろうか。‘*Summer*’ に我々は次のような言葉を見出す。

This infancy of being, cannot prove
 The final issue of the works of God,
 By boundless love and perfect wisdom formed,
 And ever rising with the rising mind.⁽²⁶⁾

そして‘*Hymn*’には‘infinite progress’⁽²⁷⁾という言葉がはっきりと語られている。自然を‘moral teacher’とみなし、都会を離れ自然に交じわり、人間の道を思索する姿勢に加え、この進歩への信頼も又、Thomson の抱いていた新たな世界像を示していると言えはしないだろうか。

IV

Thomson は確かによく言われるように‘深い洞察、深い思索の人’ではない。そして彼の神の存在への信仰も又、直観的 (intuitive) なものである。しかし、彼にとって、宇宙を科学的に理解すればする程、自然の種々なる様相は不思議の感をもって彼に迫り、神の想定は必然的に要請されたものであったと言えるだろう。しかも幸いなことは、その科学的自然観と直観的な神の遍在への信仰が、彼の精神内部にあって何らの矛盾なく調和あるものとして存在し得たことである。このような自然観に対しては、

一面確かに洞察の単純さを指摘し、安易な楽観論との非難も可能であろう。事実、*The Seasons* には、悪をも善の一部とみなす十八世紀楽観主義の思想があらわれてもいる。⁽²⁸⁾そして、形式、用語をはじめとして、自然観、人間観についても古典的な要素と革新的な要素が混ざり合って存在し、過渡期にふさわしい作品となっている。こういった欠点、矛盾はそれとして認められねばならないが、科学的な観点に立ちつつも、自然を人間が学ぶべき背景としてとらえ、内から湧き出る自然な愛情と、その自然を統べる者に対する率直な畏敬の念をもって歌った、この作品には科学と感情、科学と詩の対立は見られず、人間の科学的な精神と感覚的、感情的なものが調和ある表現形式を得ることが出来たのである。

The Seasons に対し、十八世紀後半に君臨した Dr. Johnson が ‘... , he is entitled to one praise of the highest kind: his mode of thinking, and of expressing his thoughts, is original.’⁽²⁹⁾ と最大の賛辞を呈しているように、*The Seasons* の出現は当時画期的なものだったのである。この作品に対する現代の評価は Myra Reynolds の次のことばが代表しているよう。

... so far as intrinsic worth is concerned the poems are marked by a strange mingling of merits and defects, but . . . , considered in their historical place in the development of the poetry of Nature, their importance and striking originality can hardly be overstated.⁽³⁰⁾

作品 *The Seasons* の価値が ‘transition poetry’ としてのそれのみにとどまるとしても、新しい自然を歌い、新しい世界像を示唆することにより、消極的にはあるが、古典主義の矛盾を明きらかにし、新しい文学、新しい自然観への道を示したことは、常に主張されねばならず、又、科学と宗教、或は科学と文学の対立、調和が我々自身にとっても、文学にとっても大きな問題であり解決されるべき課題であることを考える時、*The Seasons* は新たな意味をもって見直されるべき作品であるといえよう。

注

テキストからの引用は、1746年版を基に J. L. Robertson 編集の Oxford Standard Authors 版 (1965) による。

- (1) J. Delacour, *A Prospect of Poetry and Other Poems*, (Cork, 1807), p. 82.
- (2) L. R. Furst, *Romanticism*, 上島建吉訳 (研究社, 文学批評ゼミナール 2, 1970), p. 15.
- (3) J. L. Robertson (ed.), *The Seasons*, (London, Oxford University Press, 1965), p. 239.
- (4) *ibid.*, p. 240.
- (5) *ibid.*, pp. 240-41.
- (6) *ibid.*, p. 241.
- (7) S. Brooke, *History of English Literature*, (London, 1862), p. 162
- (8) J. Aikin, *An Essay on the Application of Natural History to Poetry*, (Warrington, 1777), pp. 71-3.
- (9) 'Summer', 11. 224-36.
- (10) 'Autumn', 11. 36-42.
- (11) Robertson (ed.), *op. cit.*, p. x.
- (12) 'Winter', 11. 223-40. この情景の変化の様子を Robertson は、次のように説明している。

The approach is well led up to. As we read we recall what we have often seen. The whole description is a splendid specimen of Thomson's peculiar art in the realization of a scene. It is rather a narrative of successive events set before us with dramatic vividness. The air grows colder, the sky saddens, there is a preternatural hush, and then the first flakes make their miraculous appearance, thin-wavering at first, but by and by falling broad and wide and fast, dimming the day. It is, as if by magical transformation, a world of purity and peace.

- (13) W. Wordsworth, 'Tintern Abbey Lines', 11. 108-12.
- (14) 'To the Memory of Sir Isaac Newton', 11. 39-45.
- (15) 'Autumn', 11. 1091-95.
- (16) 'Spring', 11. 208-217.
- (17) *ibid.*, 11. 529-44.

- (18) M. Reynolds, *The Treatment of Nature in English Poetry*, (The University of Chicago Press, 1909), p. 85.
- (19) 'A Hymn', ll. 1-11.
- (20) cf. J. L. Clifford (ed.), *Eighteenth Century English Literature*, (Oxford University Press, 1959), pp. 194-198.
- (21) 'Spring', ll. 32-43.
- (22) 'Winter', ll. 94-105.
- (23) *ibid.*, ll. 106-110.
- (24) 'To the Memory of Sir Isaac Newton', ll. 137-43.
- (25) 'A Hymn', ll. 100-107.
- (26) 'Summer', ll. 1802-5.
- (27) 'A Hymn', l. 116.
- (28) D. Bush は *Science and English Poetry*, (Oxford University Press, 1950), p. 60. で次のように述べている。
- Moreover, since reason and order were seen not merely as remote ideals but as the operating principles of God, the universe, and man, such a creed could hardly fail to be optimistic; and it accepted actual evils as part of the divine scheme.
- (29) S. Johnson, *Lives of the English Poets*, (Everyman's Library, 1968, vol. 2), p. 291.
- (30) Reynolds, *op. cit.*, p. 100.

(大学院学生)